

古代史教養講座 創立1995

松戸市常盤平 2-18-9

〒270-2261 電話 (047)384-5728 <http://www.geocities.jp/kdil1995>
振込銀行口座 三井住友銀行 飯田橋支店 普通預金 6355550 口座名・古代史教養講座

10月1日ゼミは開催します

古代国家形成と東アジアの概観

—10月1日講師:鈴木靖民先生(國學院大學名誉教授・前横浜市歴史博物館長)—

- 1、講演内容を記した事前紹介文や講演当日の資料配布はありません
- 2、鈴木先生からの推薦図書
「鈴木靖民編著『日本古代交流史入門』(勉誠出版、2017年) 以上。

ゼミ会場と時間: 13:15~16:50

- 1、全水道会館 中会議室(5階)
- 2、全水道会館(8階建てビル)へのアクセス
 - ①JR水道橋東口(お茶の水駅寄り)下車、北方向へ神田川を渡り、徒歩2分。
 - ②都営三田線水道橋駅下車A1出口より北方向へ徒歩1分。○電話:03-3816-4196

ZOOM視聴について

古代史ニュース313号でご案内のZOOMによる視聴について、会員有志の協力と検討の結果、コロナ環境下に限り、実行することとしました。就いては、実施要領に付き、下記の通りご案内します。

1.概要

- ・開始時期:本年11月ゼミ以降の会員による講演ゼミ
- ・実施条件:参加希望者が4人以上。ただし、ZOOMホスト(岡安会員、米野会員)の都合が悪い場合は中止
- ・参加費用:ゼミ会費1千円+ZOOM費1千円=2千円

2.手順

- ・前月15日までに齊藤 潔会員宛にメールで申込む
- ・ホスト会員がURL等をメールで連絡する。
- ・前月末までに参加費を会の口座に振り込む
- ・ゼミ講演会員がゼミ資料をメールで送付する

おおいとうすき しゃあ
大分臼杵の「蜃人」(シャア)について

—松石 賢治会員記—

1.はじめに

海人「あま」については、海に潜って魚介類をとったり、海藻を採取したり藻塩を焼いたりするのを生業とする者。漁師。古くは海部に属したあまびと、漁りびとも言われている。しかしその概念が一定していない故か、海人、海士、海女、蜃人など色々な文字が宛がわれ「あま」と読まれている。

『豊後風土記』『万葉集』では白水郎の文字があてられている。

「白水郎」は、中国では福建省泉州の漁師のことを指し、長期の漁にでるときは、米粬を入れた袋を持って船に乗るといふ。我国では泉の「白」と「水」を分けて「白水郎」を「あま」と読んでいる。

また、中国の福建省・広東省の沿岸に住む水上生活者の総称は「蜃」といわれ、船を家として漁業を生計とし、「蜃人」「蜃子」「蜃民」といわれているが、我国ではこれも「あま」と読む。

経済史学者羽原又吉は著書「漂流民」の中で次のように規定した。

- ・土地・建物を陸上に直接所有しない
- ・小舟を住居にして一家族が暮らしている
- ・海産物を中心とする各種の採取に従い、それを販売もしくは農作物と物々交換しながら、一カ所に長くどまらず、一定の海域をたえず移動している。

2. 黒潮に沿う「海部」の民たち

10世紀前半の編纂された『倭名類聚抄』に記された諸国の海部郡・海部郷、海間郷、海田郷、海郷をみると、黒潮が洗う海辺に面している処である。南九州の大隅半島の沖合を通過して太平洋を東進する黒潮は、土佐国高岡郡海部郷のはるか洋上を過ぎ、紀州の潮岬の沖に向かうが、その支流は紀伊水道に入り込

み、鳴門海峡の近くまで北上し、反転して紀伊水道に面した阿波国海部郡と紀伊国海部郡の海岸を洗う。紀伊熊野を東進する黒潮は安房、上総の国を目指す。そこには上総国市原郡海部郷がある。



一方、日本海を流れる黒潮は壱岐と対馬の間を通り、山陰沖に向かうが、隠岐国海部郡海部郷がある。黒潮はさらに東進して越前岬を超え、越前国坂井郡海部郷の沖合を能登の舳倉島付近へ走るのである。

3. 豊後国(大分)の「海部郡」と臼杵津留の「蜃人」

①海部の「幸」の設置

日本書記卷10(応神天皇3年)に、274年頃の秋10月『処 処の海人、訕嘯きて命に従わず、則ち、阿曇連の祖、大浜宿禰を遣わして、其の訕嘯を平らぐ。因りて海人の「幸」とす。故、俗人の諺に曰く、「佐麼阿摩」といふは、其れ是の縁也なり』と記されている。漁民を統率するために、阿曇族(本拠地:志賀島)に諸国の海人に海部を設けて統括させたとある。

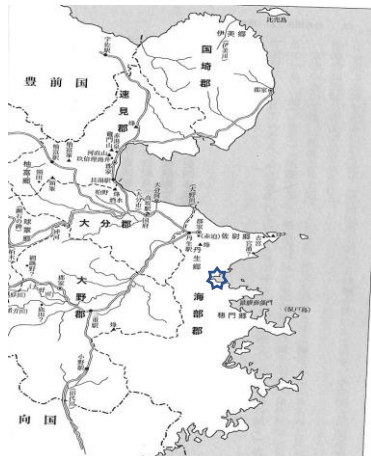
『倭名類聚抄』によると、西海道(九州)の海部では、筑前国の怡土郡、那珂郡、宗像郡にそれぞれ海部郷が記載されており、豊後国でも海部郡の記載がある。

② 豊後国海部郡の場所

『豊後風土記』によると「この郡の百姓は、並海辺の白水郎なり。因りて海部の郡と曰ふ」とあり、この地域の人々が漁師であったと記されている。

現在の大分市一部、佐伯市、臼杵市、そして保戸島がある津久見市の地域を指している。

海部郡には穂門郷、佐尉郷、丹生郷三郷があり、この地域



の中心が穂門郷で、豊後国「あま」の中心であった。

③ 臼杵津留への「蜃人」の転住(☆印)

海部郡設置からその1400年後、豊後国・臼杵津留の「あま」は、この豊後国海部郡を流れる臼杵川が、臼杵湾へとそそぐ河口の海岸付近にある津留村に転住したとされている。

4. 豊後国・臼杵津留の「蜃人」はどこからきたか

①「臼杵博識誌」の「蜃人」の項

豊後国・臼杵の知識人加島英国(本名:加嶋弥平太英国) - 1782年(天明2) ~

1854年(嘉永4) - は「臼杵博識誌」を著しているが、その中の「蜃人」の項で次の

ことを記している。

— 碓江村(現:臼杵市津留諏訪碓江)蜃人 —

昔、源平の戦い有りし時の落人、平家の車を守る舎人近藤六郎、薩摩隼人篠原主膳、森川右源と云いし者の後胤也。

安芸国佐伯郡能地村にも平家の落人漁りをせしが、慶長十己年春、与十郎、助平衛、吉勝、新助、四人の者ども家内は銘々ふねにのせ、臼杵都留碓江に住つ、平家の舎人車者といふ俗にしやあと呼ぶは誤り也。男は漁の魚を、婦女は盤帽と云器に魚を入れ、頭に載せて遠村まで売りに行く也。この一村は他村と婚姻せずして平家車者苗胤連結たり。平家の落人は芸州、防州、長州の諸国にて百姓漁人と身命を繋ぐもの数多く有りしなり。

② 豊後国・臼杵津留の「蜃人」の口碑(言い伝え)

碓江村(現:臼杵市津留諏訪碓江)蜃人が、平家の落人の子孫であり、平家の車を守る舎人であったこと(舎人:下級役人で警護・雑役を担った一下絵図)

土地伝説によると、1185年(寿永4年)源義経・範頼軍の都入りにより平家が都落ちした際、近藤五郎、蒲戸隼人、森川左源、篠原主膳の四人は安芸国・佐伯郡能地村(現三原市幸崎町)に逃れたという。



平治物語絵巻 六波羅行幸巻 国立国会図典

③ 碓江村(臼杵市津留)が1605年(慶長十年)に安芸国佐伯郡能持村から何人かの移住者により始まったこと『臼杵史談』によれば、上記落人の子孫が生計に困難を生じ、転住を思い立ち五家族が船にて豊後沿岸を漂泊したのち、現地に土着し子孫繁栄を見るに至ったという。

(風俗・風習)

他村と婚姻しなかったこと

この村は300年余以来、平家の落人の血統の純潔を保つ意味か、同族結婚を行い他との同化を固く断っており、最近まで古風を墨守し、時運による改善も行われず、因習主義の人情風俗が伝統され、特異な風習部落であった。部落の内情に関しては、団結して外部へ漏れることを恐れ、一人として口を開かず、隅々語る事は虚言多く信ずに足らない。特異な風俗として臭気芬々たる汚水・汚物を浴びせたり、屋内に撒き散らかす結婚式を取り上げている。迷信も風旺で、無知と頑固であり手が付けられぬと。

また、「おらア、平家のおちうろ(落人)らろ(だぞ)」と平家の末孫たることを無上の誇りとしていたといわれる。

(「シャア」の云われ)

俗称シャアは、平家都落ちがあまり急だったため、弁当を作る暇もなく、炊き立ての飯をそのまま袋に入れ「サア行こう」と出かけて、そのサアが「シャア」となったと伝えられている。が、淵誠一は『臼杵史談』で信を置くに足らない説とし、車者が「シャア」となったとしている。

臼杵津留の女性は男性が採ってきた魚介類を盤帽(半切桶)に入れ頭に載せて、国東から豊肥地方までの範囲を数人で行商して歩いたとされ、大分で残っている物売りの名称「おしゃあさん」はその名残と考えられていること(下写真図)



写真集 明治大正昭和臼杵 板井清一編

5. 蠻人=畚人「シャア」の源ルーツを探る

(おもな学者の諸説)

①経済史学者羽原又吉は;

中国福建省に多い畚しんと呼ばれる少数民族との結びつきを推測する。この畚人には槃瓠の子孫という伝承がある。瓠はひさご、すなわちひょうたんのことである。また犬の子孫という伝承がある。「シャア」は畚族に由来していると推測している。

②民俗学者谷川健一は;

「古代海人の世界」の中で、次のことをいっている。大分の三大祇園祭のひとつ臼杵祇園祭では、瓢箪ひょうたんを

頭につけ、瓢箪ひょうたんの模様のついた着物を着る風習があり、臼杵祇園神事が始まったのが1649年(寛永19年)瓢箪ひょうたん冠かぶりり始まったのが1668年(寛文8年)となっているが、瓢箪ひょうたんに対する津留の漁民の愛着が突然生まれたものだと思われないからもっと時代を遡らせることができるとする。この臼杵津留ひょうたん風俗は、畚族のもつ犬頭始祖信仰は、682年(天武11年)大和政権に服属し、宮中で犬の吠声をして儀式に奉仕させられた隼人につながるという。したがって臼杵津留ひょうたんの瓢箪風俗を「槃瓠ばんこの瓢箪ひょうたん」と結びつけるのは、必ずしも荒唐無稽とはいわれないと。

*「槃瓠」とは犬の名前で、中国伝説上の犬をいう。「後漢書南蛮西南夷列伝」:昔、中国・高辛氏が犬戎に攻められたとき、賞金と娘を娶せるお触れを出したところ、五彩の毛をもつ槃瓠という犬が敵の犬戎の呉將軍の首をかみ切って戻ってきた。帝の娘は約束に従って犬の槃瓠に嫁ぎ、彼らの子孫は長沙武陵の蛮夷になったという。

*「槃」=「盤」+「瓠」・この犬は「おしゃあさん」の盤帽ひょうたんかぶりようにあるいは祇園祭の瓢箪冠ひょうたんかぶりのように瓠(ひょうたん)の帽を頭に被っていたのだろうか・・・

③民俗国文学者折口信夫は;

「隼人というのは、最初の意味は海部であった」と述べ、「隼人」は九州の南端に止まり、それ以外は全国に広がっていった同種族のものがあり、それが海部であったとしている。

④法学者滝川政次郎は;

漢の武帝が南越を征したあと、飽くなき漢人の誅求をのがれた百越の民は、黒潮に乗って九州西海岸の南と北へ渡ってきた。北九州に辿り着いたのが安曇族であり、南九州の辿り着いたのが隼人族ではないかと。

このとき金属技術と水稻耕作をもたらし、鶉飼や殖蚕をもたらした。また犬祖伝説を持ち、竜蛇をトータルとする文身の習俗を運んできた。

⑤民俗学者柳田邦男は;

もともと農民とは出自を異にする渡来の海民がいたのではないかと、『魏志倭人伝』にいう水人たちも、長崎県下に残存した家船も、東シナ海をへだてた揚子江以南の地域から渡来した可能性がまったくないとはいえないと。

6. 記録や遺跡・遺品の少ない時代の歴史

豊後国・臼杵津留の蠻人=畚人の源ルーツを辿ろうすると、どこまで遡られるのか色々考察させられる。ましてや現代と異なって記録や遺跡・遺品の少ない時代である。民族の移動は気候変動による天災や食料獲得のため、そして領土版図拡大に伴う戦乱から

の逃れる難民が考えられるが、臼杵津留の蠻人＝
蠻人の祖先が故郷を捨て、海に押し出されて、その
子孫たちが豊後国・臼杵津留まで辿り着くには、遙か
長久の時空を辿らなければならない。

しかるに歴史を探るには想像力が必要となり、単なる
思い付きや主観的な考えでなく、客観性が問われる。
すなわち、仮説をいくつかの材料により組み立て
演繹的に導くやり方が史実の推測方法ではなかろう
か。

豊後国・臼杵蠻人の場合も、次の仮説組立の材料
が考えられる。

- 一 平家の落人/瓢箪/畚族のもつ犬頭始祖信仰/
はるか彼方から移り住んだという口碑(言い伝え)/
風俗・風習(文身)/言語/DNA/黒潮/米/蚕/
鵜飼/漁法/製塩/金属器/ 一

かりに海外から、特に中国大陸そして朝鮮半島からの
漂流民を想定すると、いつの時代に(下記時代のいず
れであったであろうか)、何を携えて、どこから、どんな
船で海へ押し出され、どこへ漂着したのだろうか・・・謎
解きは尽きない。・紀元前2000年(長江大洪水禍)

- ・紀元前1000年(殷滅亡時の動乱)
- ・紀元前473年(呉が越に滅ぼされたとき)
- ・紀元前334年(越が楚に滅ぼされたとき)
- ・紀元前230年～220年前(秦始皇帝全国制覇戦混乱
～漢武帝が百越を滅ぼしたとき) 了。

参考文献

- ・臼杵市史。臼杵史談
- ・板井清一「写真集:明治・大正・昭和」
- ・羽原又吉「漂海民」岩波新書
- ・谷川健一「古代海人の世界」
- ・茂在寅男「古代日本の航海術」小学館
- ・古事記/日本書記(岩波文庫)。倭名類聚抄
- ・中村啓信監修訳注「風土記(下)」角川ソフィア文庫

理事・監事

(2022年7月～24年6月)

当会の規約により、理事・監事は2年毎の改定となりま
す。本年は改定年となりますので、下記の通りご案内し
ます(あいうえお順・敬称略)。尚、当会の正会員は92
名です(2022年9月現在)。

理事:浅井 壮一郎。市川 達雄。一森 建彦。

稲垣 浩。井上 政行。磐城 妙三郎。

岡安 良宣。小川 孝一郎。川崎 信彰。

清野 敬三。倉重 千穂。小島 達矢。

齊藤 潔(代表)。坂元 洋子。鈴木 慧。

清徳 則雄。関根 昌子。二階堂 剛。

原口 久恵。藤井 輝久。藤田 一郎。

松川 博光。明城 與一。山腰 直人。

米野 博。渡邊 恭三。渡部 真樹子。

亘 康男。(以上28名、再任)

監事:守屋 尚(再任) 以上。

2022年～23年のゼミ日程(敬称略)

11月5日:①伊勢神宮の創建—増田修作。②
女王の国々と狗奴国について考える—槌田
鉄男

12月3日:①後期青銅器文明の崩壊と「海の
民」・後編—亘 康男
②「スバアネテイ」(グルジア人に含まれる先住
民族)—二階堂剛

2023年(4月以降の日は予定)

1月7日:方形周溝墓から前方後方(円)墳への
変遷—その築造規格—守屋 尚

2月18日(第3土曜日となります)
:江戸期の日本を見直すⅡ—江戸期遺
産の再評価・経済・社会編—齊藤 潔

3月4日:巨大前方後円墳の被葬者:大王とその
妻たちなど—永井 輝雄

4月1日:現日本人になった人々の起源を探る
—飯田 真理

5月6日:埼玉古墳群「稻荷山古墳」出土鉄剣銘
文を改めて見直す—【検証】辛亥年=531年、
獲加多支鹵大王=欽明天皇説は「471年・雄
略天皇説」を凌駕しえたか—相澤 省一

6月3日:伊勢神宮の創建 Ⅱ アマテラスとタカ
ミムスヒ—増田 修作

7月1日:①陸奥国うきたむ(現置賜)郡の前方
後円墳—米野 博

②大和政権と地方社会—関根 昌子

〇8月は猛暑予想の為、休講とします。

9月2日:①ホモサピエンスの新大陸への拡散
ルート。②新大陸唯一の高度文明:
マヤ文明の紹介—磐城妙三郎

10月7日:『新しい騎馬民族説の証明・バージョ
ンⅡ』—槌田 鉄男

11月4日:黄禍論—齊藤 潔

12月2日:①修験道について—市川 達雄
②倭国と日本国—鈴木 慧。